

[資料] 小鹿島果の『日本災異志』に関する課題一

統計図書館所蔵『日本災異志稿』及び関連史料

関西大学 社会安全学部* 服部 健太郎

Challenges on Nihon Siai Shi Edited by Hatasu Ogashima:

Nihon Siai Shi Ko and Related Materials owned by Statistical Library

Kentaro HATTORI

Faculty of Societal Safety Sciences, Kansai University, 7-1, Hakubai-cho, Takatsuki-shi,
Osaka, 569-1098 Japan

Nihon Siai Shi, edited by Hatasu Ogashima (1857-1892) and published in 1894, consists of various articles on historical natural disasters in Japan including earthquakes. Details of sources of historical documents used in the book has been unknown. In this study, we focus on historical documents related to Hatasu Ogashima, owned by Statistical Library. In addition, we focus on sources of Honcho Jishinko quoted in Nihon Siai Shi. We show that these two challenges are under future consideration.

Keywords: Hatasu Ogashima, Nihon Siai Shi, Nihon Siai Shi Ko, Honcho Jishinko, Earthquake of 1474-1475

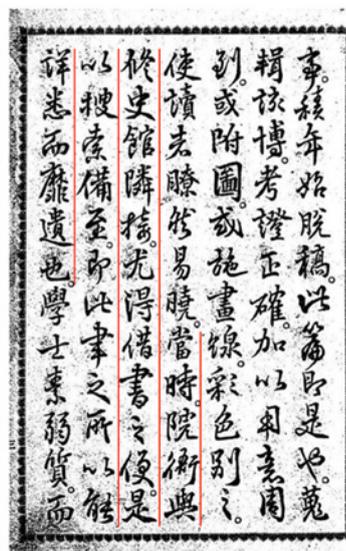
§ 1. はじめに

1981 年以来刊行が進んでいる『新収日本地震史料』シリーズの特長の1つとして、出典が明記されていることが挙げられる。未刊行物の場合は、史料名のみならず採録先に関する情報も得られ、編纂資料(東京大学地震研究所所蔵の写真帳)の情報も合わせることで、出典に遡ることができる。一方、明治期から戦前の史料集において未刊行物が出典の場合、史料の名称のみが記され、史料の所在や書写年等の情報が省略されることがある。これは、出典を遡り、採録記事を再確認することを困難なものにしている。

本稿では、^{おがしまはたす}小鹿島果(1857-1892)が編纂し、没後に遺稿が刊行された災害史料集『日本災異志』[小鹿島(1894)]に注目する。史料の出典を遡る上での課題について指摘する。

§ 2. 『日本災異志』編纂に使用された史料の所在

小鹿島(1894)の序に、編纂過程に関する情報が記されている(図1)。図1の傍線部分(4行目から7



国立国会図書館デジタルコレクション
(<https://dl.ndl.go.jp/pid/770752>)より

図1 小鹿島果 編『日本災異志』の序
(傍線筆者)

Fig. 1 Preface of Nihon Siai shi edited
by Hatasu Ogashima with added lines

* 〒569-1116 大阪府高槻市白梅町 7-1
電子メール: kenta777k@ace.ocn.ne.jp

表1 統計図書館所蔵『日本災異志』関連史料

Table 1 Historical materials related to Nihon Saii Shi, owned by Statistical Library

表題	書誌番号	注釈
日本災異志稿 卷之1～13	210.17-O39n1	(表題は題簽による. 卷之9欠. 未定稿と書込あり. 但し日本鉱業会明治27年刊本と内容殆んど同じ)
玉露叢拔萃	210.17-H24g1	(表題は題簽による. 卷1～20より抜萃. 修史館本より転写)
三災録	210.17-I39s1	(小鹿島果編統計事項叢書稿)
類聚国史	210.17-S66r1	(小鹿島果編統計事項叢書稿天)
池魚録	210.17-t1	(小鹿島果編統計事項叢書稿地)(修史館本より転写)
鎌倉大日記抜萃	210.17-k1	(小鹿島果編統計事項叢書稿)(著者未詳雪月花を合写. 修史館本より転写)
皇年代略記抜萃	210.17-k4	(平高潔著統皇年代略記を合写. 修史館本より転写)
暦仁以来年代記抜萃	210.17-r1	(小鹿島果編統計事項叢書稿日)(修史館本より転写)

総理府統計局図書館(1955)より抜粋

行目)を以下に記す. なお, 旧字を新字に改めたほか「。」は「.」に直し, 適宜「,」を挿入した.

当時. 院衙与修史館隣接. 尤得借書之便. 是以搜索備至. 即, 此書之所以, 能詳悉而靡遺也.

この箇所を, 奥積(2023)は, 次のように書き下している.

当時、院衙と修史館は隣接し。尤も借書の便を得。是以(ここをもって)搜索備至(びし=行き届く)。即ち、此の書の所以(ゆえん)、能(よく)詳悉にして遺(のこ)すところ靡(なき)なり。

小鹿島が明治十六年(1883)三月から十八年(1885)十二月まで在籍していた統計院[奥積(2023)]が, 院衙のことであろう. 修史館は, 修史局が明治十年(1877)に改組された組織であり, 明治十九年(1886)まで続いた[佐藤(2019)]. 当時の修史館が所蔵していた史料を, 小鹿島(1894)が使用したことを意味する.

総務省統計図書館が所蔵する和本[総理府統計局図書館(1955)]の中に、『日本災異志稿』と題する史料が存在する(表 1). 総理府統計局図書館(1955)によると, 刊本と内容が類似しているとされている.

表 1 には, 総理府統計局図書館(1955)の注釈に小鹿島の名が見えるもの, あるいは修史館本との関係が述べられているものをまとめた. その内, 「小鹿島果編」とあり, 「修史館本より転写」とされているものが, 『池魚録』, 『鎌倉大日記抜萃』, 『暦仁以来年代記抜萃』の3点であった(表 1).

『池魚録』は, 小鹿島(1894)の「火災之部」において, 天明七年(1787)から安政三年(1856)に至る江戸

の火災記事の出典として度々見えるものである. 『鎌倉大日記抜萃』は, 『鎌倉大日記』, 『暦仁以来年代記抜萃』は『暦仁以来年代記』という表記にて, 「地震之部」の中世の地震記事の出典としてしばしば見られる.

これら 3 点は, 小鹿島が『日本災異志』編纂のために, 修史館で写した史料の可能性がある. 直接の調査が今後の課題と言える.

§ 3. 本朝地震考

小鹿島(1894)には, 「(年代記)(本朝地震考)」のように, 2 つの史料名が併記され引用元とされる事例が, しばしば見られる. その一例が, 97 頁の文明六年冬(ユリウス暦 1474 年 11 月 10 日～1475 年 2 月 7 日)の地震である.

この文明六年冬の地震記事は, 小鹿島(1894)から, 「京都(?)」の地震として, 文部省震災予防評議会(1941)418 頁に引用されている[加納(2023)]. 宇佐美・他(2013)においても取り上げられている被害地震である. 山本(1989)は疑惑の地震の1つとしている.

「年代記」は不明であるが, 「本朝地震考」は同名の記録が, 「地学雑誌」に掲載された翻刻(例えば, 著者不明(1897a,b))に見られる.

「地学雑誌」の翻刻では, 明德二年(1391)から文明十七年(1485)に至る記事の出典が「続太平記年代記」と書かれている[著者不明(1897a,b)]. そのうち, 文明六年(1474)の項に「六年甲午冬大地震踰年不止神社仏閣宮殿城郭民屋仆頽不知其数」とあり[著者不明(1897b)], 小鹿島(1894)の記事と対応する.

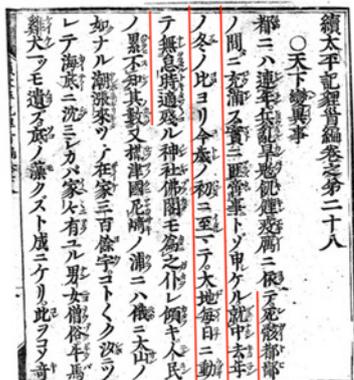
「続太平記年代記」は, 『続太平記』と『年代記』の 2

つが出典であることを意味していると思われる。『年代記』が何を指しているか不明であるが、『続太平記』は伊南芳通(1627-1717)により貞享三年(1686)に刊行された同名の軍記物[倉員(1999)]のことであろう。

国文学研究資料館蔵『續太平記 狸首編卷之二十八』の冒頭 1 丁表より始まる「天下変異事」の 2 行目-5 行目に、次のように読み下せる記述がある(図 2)。

就中去年ノ冬ノ頃ヨリ今歳ノ初メニ至ルマテ。大地毎日ニ動キテ怠ル時無シ。適残ル神社仏閣モ之ガ為ニトレ傾キ。人民ノ累其ノ数ヲ知ラズ。

この部分が『本朝地震考』に引用されたのであろう。しかし、『日本災異志』が『本朝地震考』のいかなる写本を参考にしたのか不明であり、今後の課題である。



国文学研究資料館所蔵
図2 『続太平記 狸首編 卷之第二十八』
(傍線筆者)
Fig. 2 Zoku Taihei Ki Rishu-hen, v.28
with added lines

§ 4. おわりに

明治期に成立した災害史料集『日本災異志』に記載された出典に関わる課題を指摘した。まず、刊本に記載された情報から、当時修史館に所蔵されていた史料が使用されていたこと、それらの史料および『日本災異志稿』が総務省統計図書館に所蔵されていることを示した。加えて、『日本災異志』に引用される史料のうち、さらに出典を遡る必要がある例として『本朝地震考』を挙げ、関連する文明六年冬の地震について言及した。いずれも今後の課題である。

謝辞

2023 年第 40 回歴史地震研究会(小田原大会)のポスター発表(P-01)および 2023 年 JpGU の口頭発

表(MZZ39-05)が元となっています。総務省統計図書館所蔵『日本災異志稿』のデジタル画像を、同館にて閲覧しました。国文学研究資料館蔵『續太平記』のデジタル画像を利用しました。水野嶺氏に、『本朝地震考』に関してご教示を頂きました。小鹿島果という人名の読み方について、石橋克彦氏にご教示頂きました。『日本災異志』から地震史料集に引用された記事を検索する際に、「地震史料集テキストデータベース」[東京大学地震火山史料連携研究機構(2021)]を利用しました。匿名の査読者の懇切なご指摘により、本論文が改善されました。編集者の白石睦弥氏に、丁寧なご対応を頂きました。ここに記して感謝します。

対象地震: 文明六年冬(1474-1475)の地震

文献

- 著者不明, 1897a, 地災集覧 本朝地震考(前號のつづき), 地学雑誌, 9(9), 449-454.
- 著者不明, 1897b, 地災集覧 本朝地震考(前號の續き), 地学雑誌, 9(10), 495-500.
- 加納靖之, 2023, 『増訂大日本地震史料』の「(?)」が付された網文の再検討, 地震 第 2 輯, 75, 183-192.
- 倉員正江, 1999, 兵学者伊南芳通と『続太平記狸首編』, 近世文藝, 70, 11-23.
- 文部省震災予防評議会, 1941, 増訂大日本地震史料. 第 1 卷, 945 pp.
- 小鹿島 果, 1894, 日本災異志, 日本鉱業会, 843 pp.
- 奥積雅彦, 2023, 統計図書館コラム【特別編】No.S07 小鹿島果の著書にみる統計魂【その1】日本災異志, <https://www.stat.go.jp/library/5.html>
- 佐藤大悟, 2019, 明治太政官期の修史部局における記録管理——「修史局・修史館史料」の分析から——, 国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇, 50(15), 53-70.
- 総理府統計局図書館, 1955, 総理府統計局図書館蔵書目録 和書の部, 568 pp.
- 東京大学地震火山史料連携研究機構, 2021, 地震史料集テキストデータベース, doi:10.15083/0002002833.
- 宇佐美龍夫・石井 寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子, 2013, 日本被害地震総覧 599-2012, 東京大学出版会, 724 pp.

山本武夫, 1989, 疑惑の諸地震, 萩原尊禮(編)
「続 古地震」, 東京大学出版会, 238-241.

史料

総務省統計図書館蔵『日本災異志稿 卷之 1～13』
(卷之 9 地震欠), 210.17-O39n1

国文学研究資料館蔵『續太平記 狸首編卷之二十八』, <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200002009/viewer/898>